

大学生の持つ住まいと社会の将来像

澤 島 智 明

University Students' View on
Japanese Society and Residence in Future

Tomoaki SAWASHIMA

佐賀大学文化教育学部研究論文集 第17集 第2号
JOURNAL OF THE FACULTY OF CULTURE AND EDUCATION
SAGA UNIVERSITY
VOLUME 17, NUMBER 2
January 2013

大学生の持つ住まいと社会の将来像

澤 島 智 明

University Students' View on Japanese Society and Residence in Future

Tomoaki SAWASHIMA

要 旨

社会状況が大きく変化する中で、大学生が将来の自分の住まいにどのような理想を描いているかを把握し、社会状況や生活状況の将来像との関係を考察することを目的とし佐賀大学の学生を対象にアンケート調査を実施した。結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 学生の大半が結婚、育児を前提とした家族生活の場として「郊外持ち家一戸建て」を希望している。本調査の対象学生には都心回帰、賃貸志向、集住志向などは見られなかった。
- 2) 日本の社会状況については、5年後、20年後共に様々な面で悲観的な予測が多い。
- 3) 自身の将来については、20年後には結婚し、十分な収入を得て、希望の住まいで暮らしているという楽観的な将来像を描いている。

大学生は自身の将来の住宅像について、「現代住宅双六」で描かれるような標準的な人生をなぞることを理想とし、且つ実現可能と考えているといえる。それは学生の自身の将来に対する楽観的な予測に基づくものであり、日本の社会状況に対する悲観的な予測と大きく乖離している。

1. はじめに

上田は1973年に標準的な日本人の生涯における住まいの変遷を「庭つき郊外一戸建住宅」を「上り」とする「現代住宅双六」で表現した。この「現代住宅双六」の背景には高度成長期の日本の社会状況があり、核家族の増加、住宅の郊外化、土地価格の上昇、終身雇用と収入の増加などを前提に、多くの日本人が住宅双六を進めることが理想的な人生のステップアップと捉える画一的な住居観を持っていたといえる。今日、家族や社会状況の変化により高度経済成長期に標準的とされた人生は必ずしも標準とは言えなくなり、住まいの変遷にも様々な形が表れている^{1)・3)}。例えば、「庭つき郊外一戸建住宅」を所有することが必ずしも万人の理想ではなくなり、都心回帰、賃貸志向、集住志向などの傾向が現れていることが指摘されている⁴⁾。

一方、現在の学生は雇用の流動化や経済情勢の悪化を受けて将来の就労や生活に対して大きな不安を抱き⁵⁾⁶⁾、将来に対する希望を持てないでいると言われており、そのような学生の将来像は自身の将来の住ま

い像にも何らかの影響を与えていることが予想される。

現在の若者の住居観を探ることは住宅の将来像を予測し、そのあり方を考える上で有意義である。既往研究では若者の住居観を探るために大学生を対象とした調査研究が行われている。確田らは日本人の住宅像に関して様々な層を対象とした研究を行っており^{7)・12)}、1987年には東京、大阪、富山、愛媛の女子大生（家政系の1、2年生）を対象とした調査を実施している。同調査からは、全体の約8割に戸建持家志向がみられ「庭付き戸建持家」が女子大生にほぼ共通する住宅像と考えられること、戸建持家志向が主婦層よりも深く浸透していることから、戸建持家像が若年層において再生産されていること、戸建持家像には居住歴が関与していること、東京のみ集合住宅住みかえ志向が強く、他の3地域とは異なる傾向がみられることなどを明らかにしている¹²⁾。近年では、田中らが2003年に大阪の大学生を対象とした調査を行い、学生の戸建て住宅に対する志向が依然強いものの「都心の一戸建て」や「郊外の一戸建て」という居住場所とセットになった考え方を持つ者がおり、従来の郊外の庭付き一戸建てとは違うイメージとして捉えている可能性を指摘している¹³⁾。他に、浅見らの埼玉県の短期大学生を対象とした就労意識や家族観と住意識の関係に関する調査¹⁴⁾、富田らの千葉の大学生を対象とした空間構成などの理想住宅への影響要因に関する調査¹⁵⁾などがある。しかし、既往研究では、若者が将来の社会状況をどのように考え、そのことが若者の持つ住宅像にどのような影響を与えているかを分析したものはみられない。

本研究は、社会状況が大きく変化する中で、大学生が将来の自分の住まいにどのような理想を描いているかを把握し、社会状況や生活状況の将来像との関係を考察することを目的とする。

2. 調査概要

現代の若者の持つ住まいと社会の将来像を把握するために、佐賀大学の学生を対象としたアンケート調査を行った。期間は2011年の11月中旬から下旬。アンケートは選択式で大学の講義やサークル活動を通じて配布、その場で記入、回収を行った。主な質問項目は(1)結婚観・家族観(2)将来の住まいの理想・考え(3)5年後および20年後の自分の生活状況の予測(4)5年後および20年後の日本の社会状況の予測である。詳細を表1に示す。

表1 アンケートの質問項目

- | |
|--|
| 1) 結婚観・家族観
・結婚、子供の希望
・共働きの希望
・親との同居の希望
2) 将来の住まいの理想・考え
・希望する住宅形態とその理由
・希望する居住場所
・地元定住の希望
・住宅購入・賃貸の際に重視すること
3) 5年後および20年後の自分の生活状況の予測
・結婚、就職、住まい、暮らし方、など
4) 5年後および20年後の日本の社会状況の予測
・就職率、収入、結婚率、出生率、など |
|--|

3. 結果・考察

講義やサークル活動の時間内に記入を依頼したために回収率は100%であり、有効回収数は333（有効回収率99.8%）であった。回答者の年齢は18歳から24歳で平均20.2歳、性別構成は男性136人（40.8%）、女性197人（59.2%）、居住形式は一人暮らし193人（58%）、自宅生（核家族）83人（24.9%）、自宅生（三親等以上と同居）40人（4.2%）、共同暮らし（寮生など）14人（4.2%）その他3人（0.9%）であった。

3. 1 希望する住宅形式と居住場所

図1に将来希望する住宅形式を、図2に希望する居住場所を示す。形式は「持家・戸建」（83.0%）が多く、場所は「郊外」（66.7%）次いで「田舎」（20.9%）が多い。戸建志向は持家、賃貸を合わせると86.7%であり、田中ら的大阪における調査78.6%と比較して8ポイント程度高くなっている。確田らの東京、大阪、富山、愛媛における調査において、大都市と地方都市の学生に住宅像の差異が見られることから、都市規模による志向の違いと考えることができるだろう。理想の住宅形式と居住場所の関係を図3に示す。いわゆる「郊外持ち家一戸建て」を希望する学生が過半（54.8%）であり、場所に「田舎」を加えると75%を占める。理想の住宅形式として「賃貸」は9.7%、「集合住宅」は13.3%、理想の居住場所として「都心」は10.0%に止まり、この調査結果からは「持ち家離れ（賃貸志向）」や「都心回帰」の傾向は見られない。

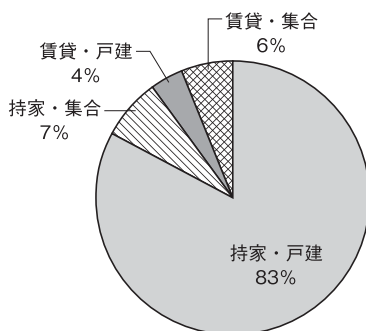


図1 将来希望する住宅形式

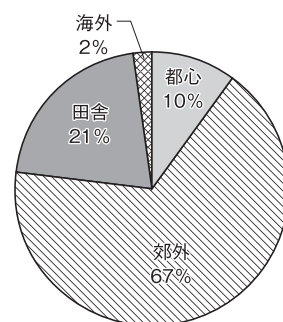


図2 将来希望する居住場所

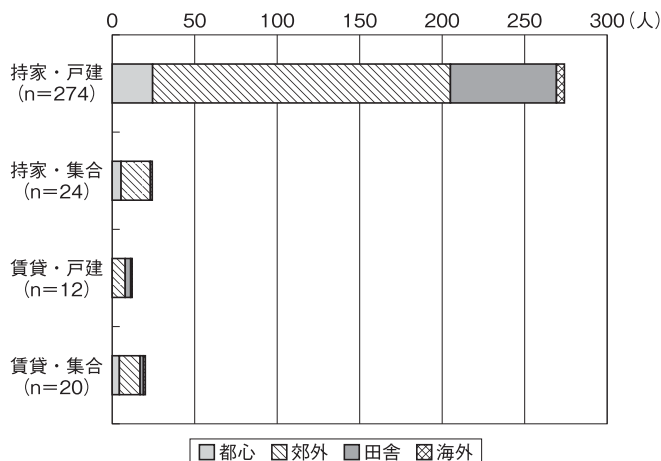


図3 将来希望する住宅形式と居住場所

3. 2 持家願望と結婚観、家族観

図4は希望の住宅形式として持家・戸建を選択した276人にその理由を質問した結果である。回答は14個の選択肢から3つまで選択可能とした。「間取り・広さを選べる」(51.7%)に次いで「家族のことを考えて」(46.9%)が多い。結婚・家族観についての設問において「結婚したい」(93.7%)「子どもが欲しい」(94.6%)と考える学生が非常に多い(図5、図6)ことから、結婚、育児を前提とした家族生活の場として「郊外持ち家一戸建て」を希望しているといえる。また、「間取り・広さを選べる」に加えて「騒音などに気をつかわなくてすむ」(36.3%)「庭が持てる」(24.0%)といった生活の場としての利便・快適性を理由に挙げる割合が高く、「老後が安心」(16.1%)「資産になる」(15.8%)「賃料がもったいない

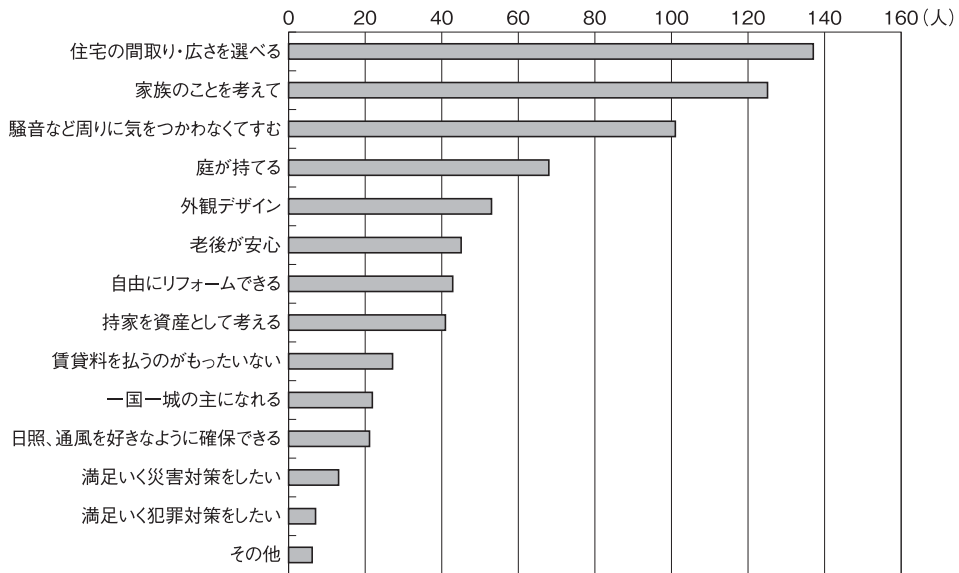


図4 持家・戸建を希望する理由

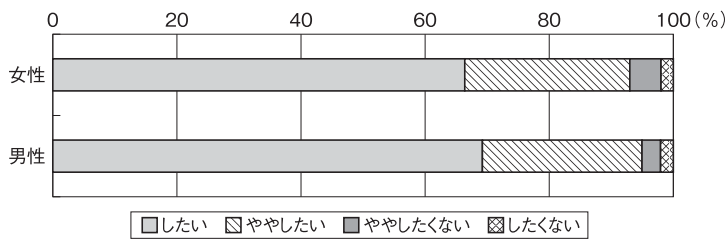


図5 将来の結婚の希望

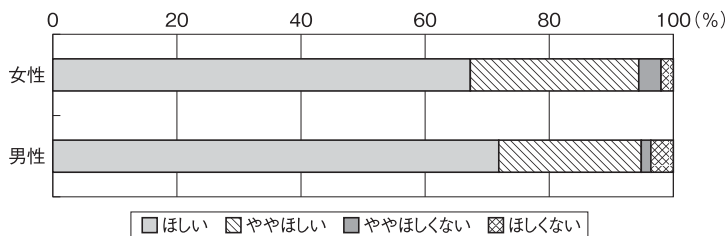


図6 将来の子どもの希望

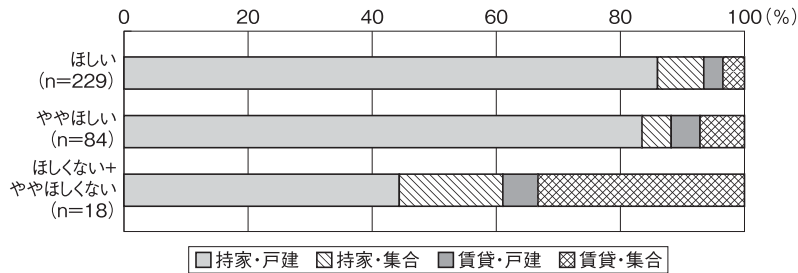


図7 子どもの希望と住宅形式の希望

い」(11.3%)などの経済的理由を挙げる割合は少ない。

図7に子どもの希望と住宅形式の希望の関係を示す。子どもが「欲しくない」「やや欲しくない」と回答したのは18名と非常に少数であるが、このグループは過半が持家・戸建ではない住宅形式を希望しており、持家・戸建の希望が育児を前提としたものであることを裏付けている。

3. 3 日本の社会状況予測と自身の生活状況予測

図8に、5年後、20年後の日本の社会状況に対する予測を示す。経済状況の悪化や少子化など現在日本の様々な問題について、改善が期待できない(変わらない)あるいは更に問題が悪化すると考える学生が多い。例えば、経済格差や自然災害は増加、所得、就職率、終身雇用、結婚率、出生率はいずれも減少を予測する学生が多く、20年後も大きな改善は期待できないと考えている。これらの項目の中には雇用や収入といった住宅取得の基盤となる事項や結婚率や出生率といった家族形成に関連する事項も含まれており、この結果だけを見ると前述した「家族生活の場としての郊外持ち家一戸建て」の実現は非常に難しいように思われる。

図9に、5年後、20年後の自身の生活状況の予測を示す。自身の将来については、5年後には90%以上が就職しており、80%以上が正規採用されていると考えている。また、60%は十分な収入を得ていると予

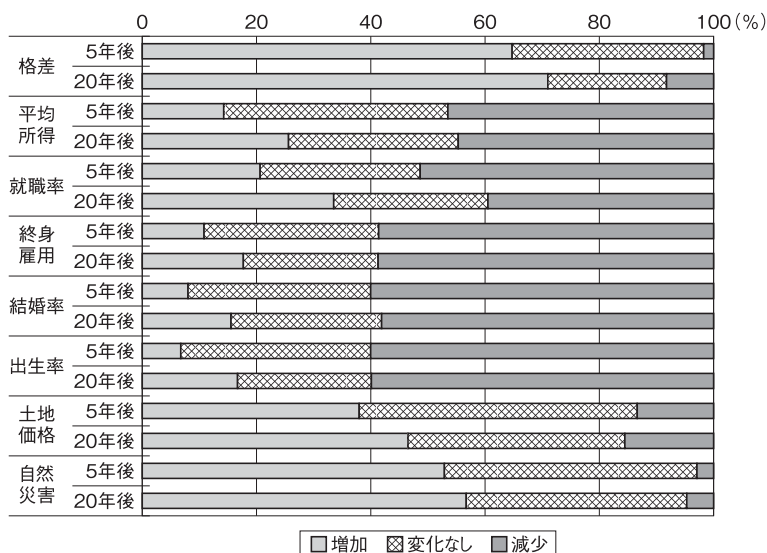


図8 5年後、20年後の社会状況の予測

測しており、就労については多くの学生が5年後には既にある程度満足のできる状態にあると考えている。一方で結婚しているという予測は20%にとどまり、理想の住まいや理想の場所に住んでいると考える学生の割合はそれぞれ16%、31%と少ない。5年後は多くの学生が結婚前であり、居住環境については準備期間的な状態と捉えていると思われる。そのために理想の住宅形式や居住場所には住んでいなくとも、それは一時的なものであるために、生活環境に満足しているという予測が60%を超えているのであろう。20年後には「災害対策」「環境対策」を除く項目で80%以上が「している」と回答している。すなわち、多くの学生が20年後には、結婚し、十分な収入を得て、希望の住宅・場所で生活環境に満足しながら暮らしていると考えている。

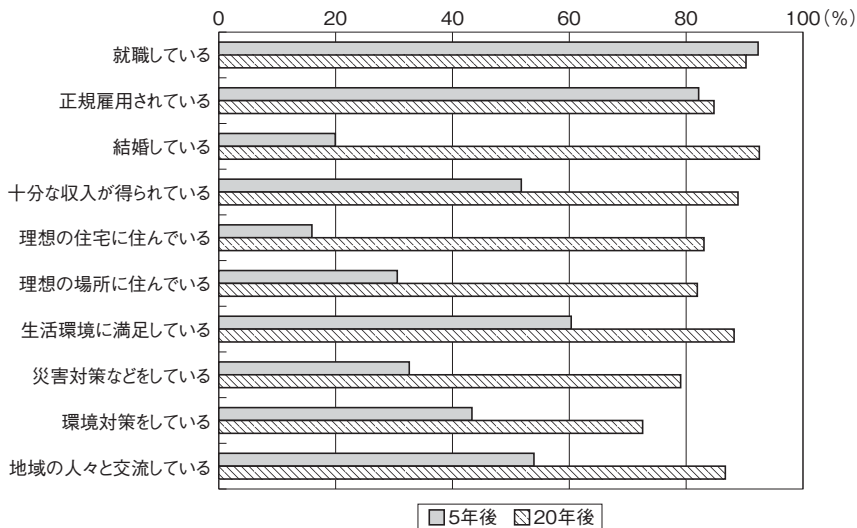


図9 5年後、20年後の自身の生活状況の予測（「いる」と回答した割合）

図10に理想の住宅形式別に5年後、20年後に「理想の住宅に住んでいる」と考える学生の割合を示す。5年後、賃貸・集合希望者の30%が理想の住宅に住んでいると予測しているのに対して、持家・戸建希望者は15%にとどまる。20歳代のうちに戸建住宅を取得することの困難さを勘案しての予測であることが伺える。一方、20年後では住宅形式による差は見られず、どのグループでも一様に80%を超えている。20年後には実現の難易度に関わらずに自身の理想を実現できるという楽観的な将来像を描いているといえる。

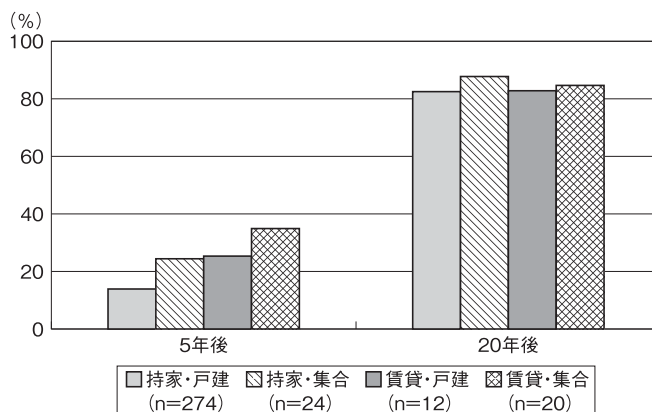


図10 理想の住宅に住んで「いる」割合（希望の住宅形式別）

表2および表3に社会状況の予測と自己の生活状況の予測の関係を示す。数値はスピアマンの順位相関係数である。相関係数はいずれも小さく、有意な関係のある項目は少ない。5年後の予測では社会状況「就職率」が自身の生活状況「十分な収入」「希望の居住場所」と、あるいは社会状況「格差」が自身の生活状況「生活環境に満足」と有意な相関があるなど、わずかだが社会状況と自己の生活状況の将来像を結び付けて考えていることが読み取れるが、20年後の予測にはそのような傾向は全く見られない。

表2 5年後の社会状況と生活状況の順位相関係数

	格差	平均所得	就職率	終身雇用	結婚率	出生率	土地の価格	自然災害
就職	-.045	.013	.032	.005	.020	.016	-.014	-.024
正規雇用	.028	-.058	.040	.006	.091	.084	-.011	-.006
結婚	.077	-.044	.047	-.065	.100	.019	.057	.009
十分な収入	.064	.090	.206**	-.024	.024	.076	-.020	-.077
理想の住宅	.005	-.016	.092	-.019	.015	.029	-.028	.013
理想の場所	-.078	.020	.137*	.027	.027	.008	.011	.122*
生活環境に満足	-.119*	.022	.057	-.045	.018	.115*	-.057	-.003
災害対策	-.025	-.073	-.033	.030	.047	.067	-.061	.079
環境対策	-.014	-.031	-.005	.026	.053	.167**	-.034	.060
地域交流	-.044	-.018	.068	.133*	-.011	-.014	.007	.001

**有意水準1%以下 *有意水準5%以下

表3 20年後の社会状況と生活状況の順位相関係数

	格差	平均所得	就職率	終身雇用	結婚率	出生率	土地の価格	自然災害
就職	.043	-.059	-.060	.011	-.086	-.068	.054	-.030
正規雇用	.051	.005	-.042	-.014	.018	-.063	-.001	-.047
結婚	.031	-.087	.048	.057	.027	.002	-.018	.023
十分な収入	-.010	.057	.007	.007	.027	-.037	-.087	-.024
理想の住宅	.039	.040	.023	.009	-.023	-.012	.012	-.016
理想の場所	.018	.039	.010	.041	-.055	-.019	.120*	-.004
生活環境に満足	-.035	.029	.074	.072	.005	.029	.008	.009
災害対策	.014	-.047	-.003	.087	-.077	-.039	-.065	.106
環境対策	-.003	-.017	.074	.121*	.089	.096	-.014	.074
地域交流	.025	-.072	.117*	.103	.051	.100	-.010	.051

**有意水準1%以下 *有意水準5%以下

4. おわりに

社会状況が大きく変化する中で、大学生が将来の自分の住まいにどのような理想を描いているかを把握し、社会状況や生活状況の将来像との関係を考察することを目的とし佐賀大学の学生を対象に、アンケート調査を実施した。結果、以下のことが明らかになった。

1) 学生の大半が結婚、育児を前提とした家族生活の場として「郊外持ち家一戸建て」を希望している。

本調査の対象学生には都心回帰、賃貸志向、集住志向などは見られなかった。大阪での既往研究と比較して、戸建志向の割合が8ポイント高く、佐賀の地域性が推察された。

2) 日本の社会状況については、5年後、20年後共に様々な面で悲観的な予測が多い。

3) 自身の将来については、20年後には結婚し、十分な収入を得て、希望の住まいで暮らしているという楽観的な将来像を描いている。

大学生は自身の将来の住宅像について、「現代住宅双六」で描かれるような標準的な人生をなぞることを理想とし、且つ実現可能と考えているといえる。このことは1980年代に碓田らが「戸建持家像が若年層において再生産されている」と指摘した実態が2011年の時点で、少なくとも佐賀という地方都市においては何ら変化していないことを示している。そして、そのような住宅像は学生の自身の将来に対する楽観的な予測に基づくものであり、日本の社会状況に対する悲観的な予測と大きく乖離している。

参考文献

- 1) 上野千鶴子：家族を容れるハコ 家族を超えるハコ，平凡社，2002.
- 2) 篠原聡子，大橋寿美子，小泉雅生，ライフスタイル研究会編著：変わる家族と変わる住まい〈自在家族〉のための住まい論，彰国社，2002.
- 3) 島村八重子，寺田和代：家族と住まない家血縁から暮らし縁へ，春秋社，2004.
- 4) 三菱総合研究所編著：2030年の「住まう」を考える，丸善プラネット，2010.
- 5) 久木元真吾：不安の中の若者と仕事，日本労働研究雑誌 No. 612, 16-28, 2011.
- 6) 乾彰夫：不安定化する若者をめぐる状況の性格と日本の特徴失業・非正規雇用と労働市場規制，教育科学研究 (23), 31-41, 2008.
- 7) 碓田智子，住田昌二：都市居住者の住宅像に関する研究戸建持ち家層とマンション層の比較を中心に，日本家政学会誌 44 (9), 769-779, 1993.
- 8) 碓田智子，住田昌二：木賃・文化住宅層の住宅像現代日本人の住宅像に関する研究 (3)，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系 (29), 393-396, 1989.
- 9) 碓田智子，住田昌二：現代日本人の住宅像に関する研究 立論の試み，日本建築学会大会学術講演梗概集 1988 (都市計画・建築経済住宅問題・建築歴史意匠), 431-432, 1988.
- 10) 碓田智子，住田昌二：若年層の住宅像 女子大生の住宅像調査 現代日本人の住宅像に関する研究 その2，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系 (28), 461-464, 1988.
- 11) 碓田智子，住田昌二：一戸建層とマンション層の住宅像比較 現代日本人の住宅像に関する研究 その1，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系 (28), 457-460, 1988.
- 12) 碓田智子，住田昌二，金岡トモコ：若年層の住宅像に関する研究 女子大生の住宅像調査，日本家政学会誌41 (1), 51-61, 1990.
- 13) 田中みさ子：大学生の住居観 住宅双六に見る若者にとっての終の棲家，大阪産業大学人間環境論集11, 75-88, 2012.
- 14) 浅見美穂，定行まり子：短期大学生の住意識から見るライフスタイルに関する考察，日本建築学会学術講演梗概集，F-1，都市計画，建築経済・住宅問題2009, 1315-1316, 2009.
- 15) 富田雄也，青木潤之助，丁志映，小林秀樹：住意識の変容プロセスに関する研究 大学生の取得してきた住情報・住経験に着目して，日本建築学会学術講演梗概集，F-1，都市計画，建築経済・住宅問題2009, 1315-1316, 2009.
- 16) 木村千博，田村明弘：学生に見る住経験と住まい観 その1 戸建住宅の所有を理想とする住まい観の形成と変容に関する研究5，日本建築学会学術講演梗概集，D，環境工学1992, 455-456, 1992.
- 17) 野津哲子：女子短大生の居住実態と住意識，島根女子短期大学紀要26, 81-88, 1988.
- 18) 亀崎美苗，塩田洋三：島根県における戸建住宅の現状と動向に関する調査研究，島根女子短期大学紀要39, 5-14, 2001.